

# 丸天井の議会とライヒ大審院

獨協大学法学部教授 小野 秀誠

現勤務校の図書館棟の天井に、ガラスの円形ドームが設置されている。かなり目立つことから、街中からでも遠望できる。その形状を説明するのは容易である。ニュースなどに登場するベルリンのドイツ連邦議会の建物の屋上のドームと同じだからである。同じなのは当然で、図書館棟を建設するときにモデルとしたからである(2007年)。天井がガラス張りのことから、吹き抜けの下の階はきわめて明るい。

連邦議会の建物は、現在でも、ライヒ議会の建物(Reichstagsgebäude)と呼ばれる。「ライヒ」は連邦に相当し、戦前は、連邦レベルの組織や機関は、ライヒと冠されていた。国鉄も、戦前は、ライヒス・バーン、戦後は、ブンデス(連邦)・バーン、民営化後は、定冠詞だけでデア・バーンである。サッカーの組織も、ブンデス・リーグである。ライヒのいわれは複雑なので立ち入らないが、帝国と訳することもある。1521年に、ルターが皇帝カール5世に召喚されたのは、神聖ローマ帝国のウォルムス「帝国」議会である。つねにライヒがつくわけではなく、1848年に、フランクフルトのパウルス教会で開かれた議会は、国民議会と呼ばれ、その民主性を反映している。また、戦前でも、ワイマール時代は共和国なので、国会と訳することもある。ナチスの陰謀で著名なドイツ「国会」議事堂放火事件(1933年)の現場である。建物は、ビスマルクの帝政時代にできたので(1884/94年)、現在でも、ライヒ議会の建物といわれ、再統一と首都機能の移転後(1999年)から、連邦議会(Bundestag)は、ここで開催されている。

ライヒ時代の建物で再生したものには、ライヒ大審院の建物もある。1879年施行の裁判所構成法によって設立されたライヒ大審院は、民事刑事の最高裁判所であったが(その前身は、ライヒ上級商事裁判所、さらにその前身は、統一前の北ドイツ連邦上級商事裁判所である)、第二次世界大戦後廃止された。最後の大審院長ブムケは、アメリカ軍の進攻前に自殺した。大審院判事の相当数も、強制収容所に入れられ、劣悪な環境から死亡した者も多い。建物は、ザクセン州ライプツヒヒにあり、現在は、連邦行政裁判所の建物となっている。再統一後の連邦機関の再配置のうちに、ザクセン州は、現在南ドイツのカールスルーエにある連邦裁判所(BGH)と連邦憲法裁判所の移転を望んだが、はたせず、連邦行政裁判所と、西ベルリンにあった連邦裁判所の刑事第5部がライプツヒヒに移転したのである(2002年から)。規模では劣るものの、連邦の上告裁判所として、連邦裁判所と同格である。

ライヒ大審院の建物は、東ドイツの時代には、博物館となっていた。ライヒ議会の建物も、連邦議会が引越してくるまでは、簡易修復されただけで、主もなく、展示場と歴史的な観光名所となっていた。付属の売店が、歴史的な地図や観光みやげを売るだけであった。いずれも、権力とは無縁の建物であったから、警備もなく、内部の見学も自由であった。帝政時代の建築物は、装飾が多く、重厚で荘重、天井も高い。巨人の建物のように、身体が小さいとトイレで足もつかない。そのままでは、民主主義の時代にそぐわない。これに対し、1999年に設置されたドームのガラス張りの天井は、明るく、内部の見通しをよくしている。ドーム内に見学コースがあり、下方の議場が見渡せる。議場も、事務的な椅子と机である。議員が特権意識で勘違いをしない工夫が施されている。ライプツヒヒの連邦行政裁判所の建物には、ガラスのドームはないが、裁判官の女性比率はしだいに増加し、36%となっている(2022年)。裁判官全体では、女性比率45.74%である(2018年に、裁判官総数2万1340人のうち、女性裁判官は9761人)。2011年には38.8%であり、同率は目前である。

ちなみに、勤務校では、グラウンドの芝も、プロサッカーの公式試合に用いられるドイツ製の人工芝である。